

---

 原著論文
 

---

## 生活文化と介護福祉援助の関係についての一考察

遠藤 清江

## Consideration of relation between life culture and Care Work

Sumie Endo

Differences in culture, daily life, the family unit, and socio-economic aspects all play roles in the way a senior is cared for by their family or friends. Since each country has different values and customs, this can be clearly seen in how the elderly are cared for.

This area which is rarely researched reveals a deep relationship between the daily life of people and what they have accomplished throughout their lives. This approach is continually validated by both Social as well as Care Workers. However, research of the care and welfare of seniors, has not been studied or reviewed nearly as much as needed in Japan.

A complete study of this area would greatly benefit researchers as well as Care Workers. Additionally, the relationship between someone's culture and the environment in which they are living, is also an important aspect. To look at how a senior is treated and cared for when not in his or her country, means a look at the care system's and daily life awareness of culturally sensitive issues. This study focuses on the above concepts.

## はじめに

介護福祉援助は、人の生活を援助していく行為である。高齢になり様々な生活行為が自分自身で十分にできなくなっても介護といった援助行為により、その人らしい生活を継続していくことが大切である。人の生活には、その人がそれまで培ってきた生活の仕方やものごとの考え方があり、それらが人々の生活様式を形成している。その生活様式は、個々人にも存在するが、地域や人種といった集団にもその集団の特異性として存在することもあり、一般的にこれらを生活文化と称する。たとえば、農村社会にみられる特有な生活様式やものごとの考え方を農村文化といい、日本人特有の生活様式や文化財などを日本文化といたりする。人の生活と文化の関係は密接であり継続的な関係にある。介護援助が、人の生活行為を補完する援助であるならば、その援助には生活文化を配慮することが必要になってくる。また、介護援助が人々の生活と密着している実践行為であり、人々の生活ともに行われてきた行為であるから、生活文化の差異は介護に対する価値観や意識や方法の違いとしても現れる。このような介護に対する文化的な差異は、介護福祉援助を提供する者からは経験的にいわれている。しかし、学

問領域としての「介護」は歴史が浅く十分な研究がなされていないのが現実である。本稿では、生活行為と生活文化の関係を提示したうえで、異文化のなかでの日本人の生活文化や高齢者の生活文化の特徴を明確にし、介護福祉援助との関係を考察した。

## I 生活行為と生活文化

人類の数千年に亘る長い間の究めの努力と営みの働きは、精神的、物質的、並に、社会的各方面に種々の文化を打ち立てて、豊かな文化財を創造し、之を人類の財産として遺してある。人の生活は、之等の文化的内容を取捨選択して生の営みの中に統一して行くのであるから、人の生活は次第に向上すると共に絶えず複雑化して行くのである。人々は之等の文化的内容を自己の生活に取り入れることに依って、個人の生活を豊富にし、複雑にしていくのである。また、此の営みの働きは、個人のとつとめにあるのみでなく、家族、團體、社會、國家等の凡ての集團に於いても同様のことがいえる。人の生活に最も近いものは家庭生活の営みである。人は家庭の生活にその営みの根據を持つ。家族は家庭に於いて、衣食住の必要な物資を受け、教育訓練の基本的なものを施され、休養、安眠、慰安を攝り、心と肉體を養ひつゝ、日常の働きの準備をなし、家族一同の團樂で各自の修養を樂しみ成就するのである。即ち人の生活の統一的営みの基本

的な場として、家庭生活が存在するのである<sup>1)</sup>。中原は、より積極的な生活行為を「営み」と称しており、「営み」の目的は、人の生活は、生命の保存、継続を維持するために営まれるものではなく、個人の幸福がその究極の目的であるといっている<sup>2)</sup>。吉野は、生活様式、行動様式の体系の中で、人の生活行動で、大部分は何らかの意味を持つ営みであることが一般的であり、それが人間生活の特徴で、その意味が文化といっている。また、生活文化とは、衣食住、育児、家庭経営の仕方から自由時間の過ごし方までを含む生活の局面にかかる文化、そして文化とは特定の社会の人々によって習得され、共有され、伝達される行動様式ないし生活様式の体系であるといっている<sup>3)</sup>。また、富田は、生活文化は、われわれに身近な暮らし方のことで、たとえば衣食住のことなどであるが、内容的にはもっと広いものを含むだろう。たとえば年中行事や余暇活動である。生活の大部分が日常生活に占められていることから、生活文化というものは、日常生活のいろいろな事柄を全体として示すものと考えられる。生活文化は、①意識内にあるもの、②行動に現れたもの、③外界の物体に現れたもの、の三つに分類できるといっている<sup>4)</sup>。

人々が生活をするということは生存のための行動のみならず、より積極的な生きるといった行動がある。たとえば、生活の一場面である食事をするといった行為は、生物体としての人間が栄養をとるだけの行為ではなく、食卓を囲む家族団欒の場でもあり、時には正月に雑煮やおせち料理を食したり、冬至にカボチャを食したり、引っ越しをしたときにそばを食したりと行事や儀式的場で人の精神的内面に意味を持つ行為でもある。これらの意味を持つ生活行為が生活文化を形成していくものと考えられる。すなわち生活文化とは、人間が学習によって身につけた生活行動様式並びにその行動の伝承をいい、技術を通して環境を人間の生活目的に役立てていく過程で形成された生活様式といえよう。すなわち生活文化は生活環境や人々の共有する社会が異なれば、異なると当然のものであるといえる。人間は、長い歴史のなかで足歩行により、手を解放し、知能を発達させ学習により道具を作り生活様式を獲得してきた。生活の主体は生活者である人であり、それぞれの生活、生活行為を身に付けていく。その生活行為は、やがて生活習慣となり生活文化となっていく。生活文化は個々の人々の人生のなかで長い時間をかけて形成されていくものであり、それらの伝承による積み重ねられた歴史のなかで形成されていくといえる。

## II 日常生活における生活文化

人間の行動は大部分が社会的行動であり、その社会的行動はその過程に於いて何等かの生活様式を形成するものであると共に、一旦形成された生活様式は実存生を獲得し、社会的行動に対して外部からの拘束を加える。このように文化は一般に価値と直接関係を有しない特定の人々の生活様式を意味するものである。具体的に言えば我々日本人はその日常生活が如何なる視角から考察されるにせよ他の人類集団には発見できない独特の生活様式を持っている。即ち木造の家と畳、洋服と和服の併用、米の飯に味噌汁、等の如く基本的な生活様式、他方これらに関連する挨拶の仕方、接待の観念、神仏の信仰、倫理思想、美的標準、子供の躾等に於いて英国人、独乙人等の人類集団と明に異なる多くのものを有している。これらの日本人に特有な生活様式を包括的全体的に見た場合日本文化と行うことができる<sup>5)</sup>。日本文化の一つに、着物といった民族衣装を身にまとふことがあるが、現代社会に於いては日常のなかで着物を着て生活している人々は少なくなっている。しかし、冠婚葬祭や正式な場では着物を着たりする。時代の流れなかで、着物を着ながら日常生活を過ごすことの不便さから洋服への文化と変わっていったのではないかと考えられる。しかし、生活文化のなかには生活環境や時代が変わっても変わらず残り続けるものもある。このような日本人特有の生活文化は、異文化のなかで生活する日本人にも存在する。特に生活文化は日常生活のなかで衣食住において現れるのではないかと考えられることから、筆者がフィールドワークを通して経験した日本人の生活文化について衣食住の側面から考察していきたい。

衣生活では、どのような物をいかにきるかといったことも生活文化の一つとして現れるのではないかと考えられる。筆者が訪米したときに、自分で作ったジーパンを着用している女性に出会った。この女性は、40年間アメリカで生活している72才の女性である。夫(帰米2世)との結婚を機にアメリカでの生活が始まったが、アメリカに来たばかりの頃は、日本人のサイズに合う服はなかったとのことだった。そこで、生地を購入し自身で服を作っていたとのことだった。その女性が育った時には、嫁入り前に和裁や洋裁を習うのが常であつたとのことだった。自分も和裁も洋裁も習っていたので、自分が着用しているジーパンは、アメリカに来たときに生地を買って自分自身で作った物であつた(写真1)。この女性は、子育てにも日本で身につけた洋裁を役立てたとのことだった。それは、親に子どもの服を買うのは恥といったこ



写真 1

とを教わり、和裁や洋裁を習ったとのことだった。また、アメリカで生活している日本人高齢者のなかには、洋裁や編み物をする女性が多い。若いときは、日本で身につけた洋裁の技術を生かして収入を得ていたといった女性も多にいる。これは、これらの世代の女性たちが、和裁や洋裁が嫁入り道具の一つだった時代に育ったためと思われる。これもその時代の生活文化の一つだったのではないかと考えられる。また、アメリカで生活している若い世代の日系人には、着物や浴衣の着付けのワークショップなども人気があり、着物といった日本文化への関心の高さがうかがえる。

食生活では、どのような食材をどのように調理する。また、食事のマナーなどにも文化が現れると考える。アメリカの日系社会では、高齢者などへの給食サービスが様々な形で盛んに行われている。特に和食のサービスは高齢者に人気がある。また、新しい高齢者入所施設のオープンでは、和食中心のサービスを売りにする施設もあり、入所者の希望が殺到する。日系高齢者の方々も、朝はトーストやオートミールとコーヒーといったアメリカンスタイルにしているが、昼もしくは夜は和食としている人が多い。しかし、最近では和食サービスを提供している日系の高齢者入所施設でも、和食の味が変わってきているとのことだった。一昔前であれば日本人が作った和食を給食サービスとして提供できていたが、日本人の調理人が不足しているため日本の味がだせないのである。アメリカ社会のなかではマイノリティである日本人が働ける場所が限定され福祉施設などで調理人として働く人も多かった。しかし、日本食レストランが多くできたことにより、調理をできる人々がより高い賃金で働ける場

所へと移ってしまったため、日系福祉施設で調理をする人々がラテン系などの他の人種になってしまったのである。よって見かけは和食であっても味が違う和食もどきになっているのである。この傾向は配食サービスなどでもあり、配食サービスを利用している高齢者からも調理方法や味に対する変化があるといったことが聞かれる。配食サービスを利用している高齢者によると、醤油をベースに味付けをするものでも時々極端に甘い味付けの時があったりする。また、特に麺類は、茹ですぎていることが多いとのことだった。味付けは、味覚を必要とする物なので食生活のなかでも、文化の影響を受けやすいのではないかと考えられる。また、日本で生活する外国人花嫁達にとっても和食の味付けは難しいことの一つでもある<sup>6)</sup>。

また、日本人でアメリカに渡りメディカルアシスタントの資格をとり、起業し訪問介護の仕事をしている女性がいる。この女性のクライアントは、大半が日系人だが人種の制限をしていないため日系人以外の依頼もある。ある時黒人高齢者から家事援助の依頼を受け訪問した。食事を作って欲しいと、いくつかの食材を出され調理方法を教わった。しかし、それまで見たこともない食材で、食べたこともない料理を作れるのか心配になったが、言われるままに調理した。しかし、食感の度合いや味付けがうまくなかった。できあがった物を食す黒人高齢者に確認すると「味が違う」「まずい」といったことの繰り返しで最後には「仕方ないわね」とあきらめて食べていた。訪問介護をした日本人女性は、特に自分が食べたことのない物の味付けをするのが難しかった、最後まで黒人高齢者の望んだ食事を作ることができなかったと言っていた。

日本人はよく調味料として醤油を使うが、その濃淡は味覚によって定められる。調理に関わる技術の作用について、自然と文化、すなわち調理しないものと、調理したもの、また、その総体に関与している恒常性をあらわし、精神的存在と考えてよい<sup>7)</sup>。食事の味付けなどは、味覚に左右されるため経験が影響する。日本人に限らず人間にとって味覚は毎日繰り返される学習のなかでは固定されていくため文化的影響が顕著に現れるのではないかと考えられる。

住生活については、建築物そのものだけではなく空間的なことにも文化的差異が現れると考えられる。アメリカで生活する場合、住宅スタイルはアメリカ様式となる。しかし、そのなかで日本人は、日本文化を住空間に取り入れていることが多い。日本には、家に入るとき靴を脱いで裸足で生活をするといった習慣があるが、アメ



写真2

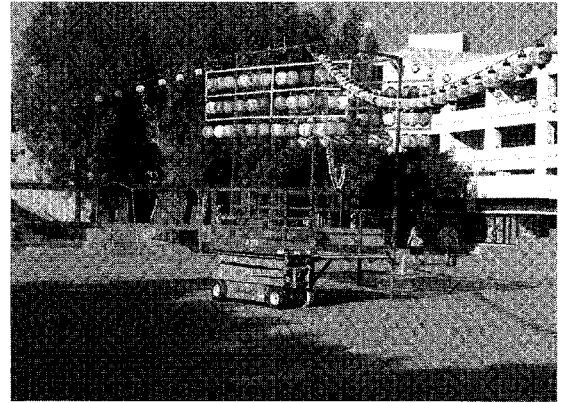


写真4



写真3

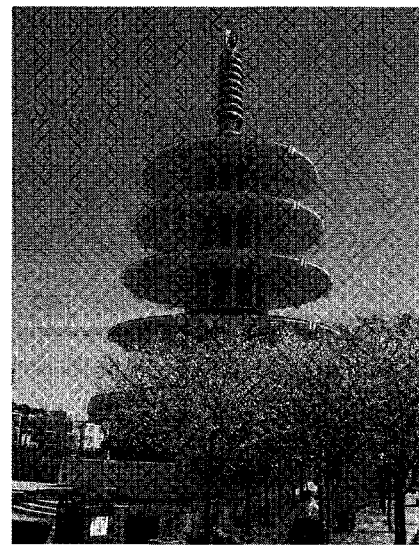


写真5

リカ人は家の中でも靴を履いていることが多い。アメリカで生活していても、家の中では靴を脱ぐといった生活スタイルをとっている日本人が多い。また、家具などはアメリカで購入した物を使っているが、生活空間の中に日本の掛け軸や日本画といった調度品を飾ったりしている日本人が多い(写真2)。特に高齢者になると、カーテンの代わりに障子を使っていたり、畳を使っている日本人も多い。障子は、障子紙があれば自身で張り替えることが多いようである。畳は職人の手を必要とし、日本製の畳は高価で手に入れることが難しいので、東南アジア産の畳を使用していることが多いようである。この東南アジア産の畳はとても軽量で、畳職人がいなくても簡単に張り替えることができる。このような東南アジア産の畳であっても洋式の住宅に取り入れていること、椅子スタイルの生活様式をとっていても畳を取り入れて座る生活も取り入れていることは、畳文化は日本人にとってなかなか手放すことができない文化の一つであると考えられる。また、生活空間のなかに仏壇を置いている高齢者が少なくない。特に先祖代々の位牌があるわけではなく、亡くなった夫や兄弟の写真などが置かれている(写真3)。また、浴室は、浅いバスタブにシャワースタイルの物が多いが、この浅いバスタブにお湯を張り入浴時間を楽しむ人も日系人も少なくない。日本人には、風呂

好きで特有の入浴方法がある<sup>8)</sup>。肩まで湯につかることができないような浅いバスタブでも、湯を張り入浴を楽しむ行為は日本人の生活文化の一つであると考えられる。また、サンフランシスコの日本町には共同入浴施設がある。開店前には、長蛇の列になり開店時間を待っている人々の姿を見かける。

また、アメリカ西海岸エリアの日本町では生活空間の色々な場面で日本文化を垣間見ることができる。写真4は、日本町の盆踊りで使われるやぐらである。写真5は、日本町に建っている五重塔である。写真6-1は、アメリカの高齢者施設で行われたファッションショーの一場面である。写真6-2は、日本の高齢者施設に飾られた利用者の習字である。それぞれが日米の高齢者施設で最もよく行われているアクティビティプログラムの一つであるが、日本の高齢者施設ではファッションショーを、米国の高齢者施設では習字を目にすることは少ない。また、写真7-1は、白人が入所する高齢者施設の庭であり、様々



写真 6-1



写真 7-1



写真 6-2

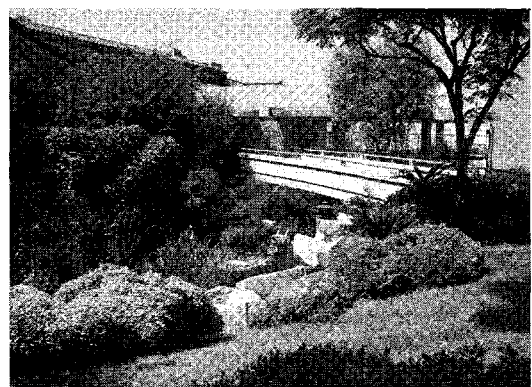


写真 7-2

な色のバラで飾られている。写真 7-2 は、日本人が入所する日系高齢者施設であり、日本庭園の造りになっている。このように生活環境にも文化が現れている。また、写真 8 は、日系高齢者施設の壁一面に張られている折り鶴のモチーフだが、この折り鶴には寄付をした人々の名前が刻まれている。よく、日本では、神社などのお祭り際に御神酒や寄付をしてくださった氏子の名前が張り出される。このような風習を真似して施設に対して寄付をしてくださった方々の名前などを折り鶴に刻み張っているとのことである。

これまで述べてきたように、異文化のなかであっても、生活の様々な場面で日本文化を垣間見ることができる。文化は人の意識のなかに歴史的に形成され行動や生活様式として現れる。日本には、郷に入っては郷に従えといった言葉があるが、生活文化のなかには、人の意識と大きく関わることや毎日の生活なかで繰り返されてきて形成されたものは、異文化のなかであっても容易に変えることができないものがあるといえる。

### III 生活の継続と高齢者文化

生活文化が、日々の生活のもと継続的な生活様式の繰

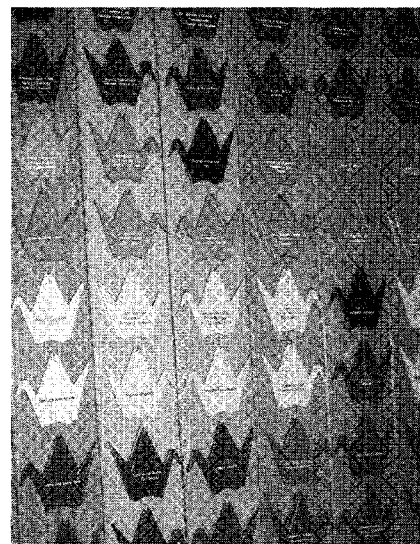


写真 8

り返しにより形成されていくものであるならば、高齢者の生活そのものにも文化的な要素があるのではないかと考えられる。

たとえば排泄といった生活行為を例にとって考えてみる。生まれたばかりの赤ん坊は、オムツをしており排泄

の不快感を泣くことにより母親などの他者に伝え、他者の手によりオムツを交換してもらう。その後、おおむね2才から3才頃にはトイレトレーニングを行い、小学校に入学する頃には排泄行為は完全に自立している。これらは、人間の発達といったことに組み込まれているが、排泄といった生活行為は自立してしまえばそれ以上発達することはない。やがて、生活行為は、生活習慣となり、それぞれの生活習慣ごとにみられる特徴や独特の行為は、生活文化といったかたちになる。

ある福祉法人が個室型の高齢者施設をつくった時の出来事であるが、その個室の一つに認知症の高齢者が入所した。ある日職員がこの方の居室を訪問してみると、ご本人は居室にはおらず、廊下などを見渡しても見あたらなかった。各部屋にはトイレが設置されていたが、居室のトイレのドア半開きになっており人の気配がしたので、覗いてみるとその認知症の高齢者の方は、洋式便器で一生涯に顔を洗っていた。この高齢者の方はもともと農業をしており田舎育ちだったため、和式スタイル＝トイレといったことが、長い生活習慣のなかで身に付いており、和式トイレがこの方にとっての生活文化だったと考えられる。この認知症の高齢者の方にとっては、水がたまった白い洋式便器は、トイレではなく白く水のたまった容器すなわち洗面所として認識されたのであろう。認知症になって、過去の長い生活習慣が思い出されたのだと考えられる。

また、アメリカなどのトイレは洋式便器が使用されているが、ドアや壁といった便器の囲いは、防犯から人が立ったときの膝上からしか設置されておらず、足もとは隣や外部とつながっている。また、日常でもバスやトイレの水場は使用していないときはドアを開放している。また、アジアなどでは、レストランでトイレに入ったときにチップを払ったりする国もある。また、モンゴルの遊牧民には、便器を使うといった習慣はない。大草原であれば水場以外に排泄をしかまわないのである。排泄といった生活行為一つをとっても様々な生活文化があることがうかがえる。

このように生活文化は、人々の生活習慣のなかで培われており、特に高齢者の場合、長い人生のなかで日常生活を通してその生活様式は固定化しており、生活文化となっている。

壁谷澤は、日本の老後生活の行動型や価値体系には、他の民族に比べて特徴が見られると考え、日本人の老後を生活文化の一つとしてとらえ、老後の生活文化を老後文化としている。老後文化は、老後生活にかかわる衣食住、保健、余暇、家族イデオロギー、慣習、行動などの

すべてが含まれるとしている<sup>9)</sup>。小椋は、施設で生活する高齢者の方々が生きた時代の社会背景からくる生活思想や遊び、また、食文化や民族文化といったことを高齢者福祉文化史論のなかで紹介している<sup>10)</sup>。

特に高齢者の生活の場合、生活の歴史や生活の継続性といったことを考えると、今現在の生活文化は、過去の生活文化を継続するものであり、現在の生活文化は過去の生活文化の影響を受けているといったことがいえる。

#### IV 生活文化と介護福祉援助

日々の社会福祉専門職を養成するなかで、数年前のことであるが、筆者が介護概論の授業で、ホームヘルパーが高齢者のお宅を訪問し家事援助を行っているビデオを学生に見せたことがある。そのビデオのなかで洗濯槽が2槽式になっている洗濯機が映し出されていた。ある一人の学生から、あのような洗濯機は家電売り場で見ることがあるが、実際使ったことがない。自分はホームヘルパーの資格も取ったが、高齢者のお宅に訪問して、2槽式になっている洗濯機があったら使うことができないというのである。周りの学生も肯いているので確認してみると、大半の学生が2槽式になっている洗濯機を使ったことがなかった。学生によると自分たちは、洗濯機といえば全自動だし、これまでの生活でも全自動洗濯機しか使ったことがないとのことだった。高齢者の生活のなかには今の若者たちが使ったことのない物があることを実感させられた出来事だった。

また、一昔前になるが、福祉施設に学生が実習に行くときに金髪や肌を必要以上に露出した服装を避けるよう指導した。若い世代の学生にとっては、髪を金色にすること、下着のような服はファッションの一つであり若者文化であった。しかし、それらの若者の生活文化は高齢者の生活文化には簡単に受け入れられることではなかった。高齢者の戦争体験からくる金髪のイメージや高齢者にとっての必要以上に肌を露出することの意味を教えたりした。

祖父江は、第二次世界大戦直後から1970年代にかけての日本の村落における生活様式の返還をおおむね10年ごとに4つの時期に分けて概観している<sup>11)</sup>。それぞれの時代には生活の変化の特徴がある。その時代に育った人々の意識のなかには、その時代の価値観や社会的背景の影響があり、文化は人々の意識下のもと形成されていくので、生活文化にも時代により変化するものがあると考えられる。このような時代の違いからくる生活文化の違いが、高齢者と若者の間で世代間ギャップとして生じ



るものとする。このような世代間ギャップを援助に積極的に取り入れている高齢者施設がある。正月の準備などの生活文化を若い世代の介護職員が、高齢者から教わりながら、一緒に施設の正月の準備をするといったことだった。しかし、形として目に見えやすい世代間ギャップは、この施設のような取り組みで多少は解決できるが、精神的なものや考え方など目に見えにくいものは違いにすら気づくのが難しいのではないかと考える。

介護援助を実践していく場合に、このような介護される側とする側の世代間ギャップをどのように埋めていくのかといったことも課題となる。

また、生活文化は地域によってもその差異が現れることがある。東北の山間過疎地域では、現在でも高齢者が石風呂を使って生活している地域がある。石風呂とは、薪を使った五右衛門風呂であり浴槽が石でできている風呂である。また、薪ストーブを使っていたり、魚を焼くのに七輪を使っている高齢者がいる。若いホームヘルパーが、そのような生活スタイルをとっている高齢者のお宅に訪問しても、薪での火のおこし方などがわからず入浴を介助するのにかなり時間がかかったことがある。また、ケアマネジャーが寝たきり高齢者を介護している家族に様々な介護サービスを勧めても、本家が介護サービスを使っていないから分家の我が家が使うわけにはいかないといった返事が返ってくることもある。本家分家といった伝統的な人間関係は、都市部では見られないことであるが、農村過疎地域などでは人々の意識のなかにまだ残っているのである。

また、東北では、葬式を七日間行方地域がある。女性と男性の役割が明確になっており、葬式の運営を仕切るのが男性の役割、女性は精進料理を作り、慰問者への接待が中心となる。このような地域では、高齢者の介護は嫁の役割、女性の役割といった認識が強い。

また、以前東北地方の大学に勤務していた時に、九州出身の学生から東北の高齢者施設で実習を行うことへの不安を訴えられたことがあった。その学生は、アルバイトなどの日常生活のなかで、人々の人間関係の形成の仕方、生活のなかでの些細な意識が九州と東北では違うことを感じており、高齢者施設に実習に行くと高齢者の方々と人間関係を築けるか不安を抱えていた。そこで学生は一人暮らしの高齢者のお宅を訪問し話し相手になるボランティアを始めたが、今度は方言といった言語的文化の壁に突き当たってしまった。

このように地域による生活文化の違いや介護に対する意識の違い、ジェンダーといったことも介護援助に影響を与えており、このような違いがあることは介護を提供

する側も理解しておく必要がある。

また、生活文化の違いは、人種的な違いからも起きてくる。日本人男性とフランス人女性の夫婦のケースである。ある日、夫が初期のアルツハイマー型の認知症と診断された。フランスではインフォームドコンセントが一般的であるためフランス人の妻は、夫がアルツハイマー型の認知症と診断されたこと、今後の症状の変化など医師に説明されたことを、そのまま夫に話した。夫は、気持ちの準備もないまま突然自分がアルツハイマー型の認知症であることを妻に聞かされ、パニック状態に陥ってしまった。そんな夫の様子を見た妻もパニック状態となり、夫を残してフランスに帰ってしまった。このような人種的な文化の違いを援助者が理解していれば、アルツハイマー型の認知症の夫をおいて妻が帰国してしまうこともなかったかもしれない。

また、介護そのものに対しての人種による意識の違いもあると考えられる。藤田は、自らのフィールドワークのなかの介護経験から、「世話をすること」「されること」の日米の意味の違いは、日常的に介護が必要になった場合にもみられることが明らかになった。脳梗塞の後遺症で左半身麻痺の女性の介護経験から、日本流の「相手の心を察して、言われる前に行動する」というのは、アメリカ文化では美徳ではなく、「相手の意志を十分に確認していない」「相手の仕事を奪ってしまう」行為としてみられると述べている<sup>12)</sup>。また、マサミ・コバヤシ・ウィズナーは、アメリカでのボランティアや要介護となったアメリカ人義母の経験から、アメリカ人の高齢者への介護の感覚は、日本人とは違うといったことを述べている<sup>13)</sup>。また、三原は、日本とドイツの介護学生や介護福祉士への調査から介護に対する意識に差があることを示している<sup>14)</sup>。このような人種による介護観などの違いは国際化する日本社会にとって認識を高めておかなければならない。

様々な介護場面において生活文化の違いが、介護福祉援助に影響を与えていることがいえる。生活文化を配慮しての介護福祉援助を行うことこそが生活を援助するといったことになると考えられる。また、少子高齢化、核家族化といったことから日本の文化伝承が危ぶまれているが、介護の場は生活の場でもあるため文化伝承の場になるとも考えられる。生活文化を配慮した介護福祉援助により高齢者の世代から次の世代となる介護者へと文化が伝承される一端となり得ると考えられる。介護とは、介護を必要としている人が、人間として生きるための「生理的欲求」「精神的欲求」「社会的欲求」「文化的欲求」を満たすための援助であり、その人らしい生活を維持し、

向上させることを保障するための援助である<sup>15)</sup>。介護福祉援助のなかに生活文化的な配慮を取り入れることにより、その人らしい生活が継続でき生活の質の向上へとつながると考える。また、介護サービスを提供する側が生活文化の違いが介護に様々な影響を与えること、異文化を提供される介護利用者にはストレスが生じることを理解し援助にあたる必要があると考える。

## おわりに

昨今、介護労働市場における外国人労働者の受け入れについて検討されている。フィリピンとのEPA (Economic Partnership Agreement: 経済連携協定) 交渉では、日本語能力や資格取得要件といったことで考えられており、日本文化の教育といったことなどは配慮されていない。日本人高齢者とフィリピン人介護者、この両者の生活文化の違いや価値観などの違いを政府はどのように受け止めているのか疑問に思う。

アメリカ社会のなかで成功した日系人たちが投資してできた日系高齢者施設がある。成功した日系人は、その施設で自らが介護を必要としたときに日本人による介護を提供されたいといった願いから投資をした。しかし、そこで働くケアワーカー全てが日本人以外であり、生活する高齢者は日本人である。そこで生活する高齢者たちは日々の生活のなかで、介護される側介護する側の文化の違いを感じており、それが日々のストレスや不満となり、そこを訪れる日本人に日本語で愚痴をこぼしている。日本語であれば、ケアワーカーに通じないからあえて日本語で愚痴をこぼしているのである。将来日本の介護現場は、どのように国際化を遂げているのであろうか。

また、日本社会は急速に国際化が進んでいる。様々な国の人々が日本で生活しており、駅での案内表示なども英語、ハンガール、中国語で表示されている。このように国際化する日本社会では、介護サービス提供者が日本人で利用者が外国人であることも増えよう。

文化の違いを否定的にとらえるのではなく、他国文化を知ることは視野が広がるとともに、自国文化を見直すこととなり、自国文化の良い点も見えてくるものである。その様な文化の違いの利点を援助に生かすことができたなら、介護現場でも真の国際化や国際交流といったことが実現すると考える。

介護者自身が自分の生活文化を知り、他者の生活文化との違いを知る。また、介護についての自国文化を知り、他国文化との違いを知ることが必要である。そして、生活文化の差異と介護援助の関係を明確にし、介護実践に

反映させていくことが国際化する介護の現場にとって急務の課題と考える。

## 引用文献

- 1) 中原賢次「家政学原論」『家政学生活学基礎文献集11』, 大空社, 東京, 1988, pp.14-16
- 2) 中原賢次「家政学原論」『家政学生活学基礎文献集11』, 大空社, 東京, pp.13
- 3) 吉野正治, 「生活文化とは(Ⅰ)」, 『生活文化論(日本家政学会編)』, 初版, 朝倉書店, 東京, 1991, pp.2-6
- 4) 富田守「生活文化とは(Ⅰ)」, 『生活文化論(日本家政学会編)』, 初版, 朝倉書店, 東京, 1991, pp.10-11
- 5) 佐藤政雄, 「生活様式としての文化」教育創造 [ISSN:0910-9846] (高田教育研究会) 6(9) 1953.9 p.45-49
- 6) 宿谷京子『アジアから来た花嫁—迎える側の論理—』第4刷, 明石書店, 東京, 1993, pp.150
- 7) 小野寺三二「日本の調理文化—食生活洋式における調理技術の伝承と発展—」『創立二十五周年記念論文集』, 東横学園女子短期大学, 1981, pp.122
- 8) 市川孝一「入浴の生活学—日本人の入浴行動と入浴文化—」生活科学研究, 文教大学生生活科学研究部, 第10集, 1988, pp.41-43
- 9) 壁谷澤万里子「老後」『生活文化論(日本家政学会編)』, 初版, 朝倉書店, 東京, 1991, pp.155-156
- 10) 小椋喜一郎『高齢者福祉文化史論』, 初版, 中央法規出版, 東京, 2001
- 11) 父江孝男「戦後日本の村落における生活様式の返還」変貌する韓国社会 1970~80年代の人類学調査の現場から (Academic series New Asia 26) 嶋陸典彦, 朝倉敏夫編, 第一書房, 1998, pp.333-363
- 12) 藤田真理子「〈特集〉「介護の人類学 特集の序文」『文化人類学』第70巻第3号, 日本文化人類学会, 東京, 2005, pp.329
- 13) マサミ・コバヤシ・ウィズナー『シニアが活かすアメリカのNPO』, 初版, 現代書館, 東京, 2002, pp.142-149
- 14) 三原博光『介護の国際化—異国で迎える老後—』, 初版, 学苑社, 東京, 2004, pp.70-95
- 15) 井上千津子『わたしのホームヘルパー宣言!』, 初版, インデックス出版, 東京, 1998, pp.20